

エルフリックの『聖人伝』

——翻訳と注解——(8)

網 代 敦

Ælfric's Lives of Saints

Japanese Translation with Commentary (8)

Atsushi Ajiro

XII. 灰の水曜日*¹

これは四旬節前七日間に関わる話である。あなた方自身も知っているように、今週の水曜日はカプット イエーイウーヌス、すなわち私たちの言葉で言うと四旬節の大斎の初日²である。私たちは日曜日の第三時³と晩に食事をする。というのは、もしその日に断食をしようとし、しかも意固地からそうするとしたら破門されてしまうくらいに日曜日は神聖な日だからである。またどんな人も日曜日に跪く⁴ことはできない。そうはいうものの、諸書が私たちに語るところに従い日曜日も他の日も酒に酔い大食することは避けるべきであろう。まさに四旬節のときは特にそうである。さて、もし水曜日、木曜日、金曜日、土曜日と四旬節の大斎前の四日間断食をしないのなら、私たちの四旬節の大斎における四十日間は満たされるものとはならないであろう。このことは今あなたたちに告げるのだが、ずっと以前に定められたことである。

この灰の水曜日に、司祭たちは地上の至る所の教会で、定められたままに汚れない灰を祝福し、その後人々の頭に灰を被せる。これは、アダムが神の命に背いた後で全能の神がアダムに述べた、人は大地から生まれまた再び塵に戻るということを思い起こさせるためである。(神はこうアダムに告げた)「この大地で、あなたは苦しんで日々を送り、汗を流してパンを食べる。そして生まれてきたその大地に再び戻る。というのは、あなたは塵であり塵に帰るからである」⁵これは人の魂のことを述べたものではない。それまでは冬の寒さに打ち負かされていた木々のすべてが四旬節の時期という絶えず蘇るように、崩れて塵になるもののその後、我らの主の御力により、かつて生を受けていたものが最後の審判の日に皆大地から復活する人の体について語ったものである。私たちは、古い立法の書の中でも新しい立法の書の中でも、自らの罪を悔いる者は灰で身を一面覆い袋地の粗服を身に纏ったことを読む。⁶さあ、今度は私たちがこの四旬節の始まり

にこの一部を試みよう。四旬節の大齋に私たちの罪を悔いるべきことをしるすため、頭に灰を振りかけよう。

ウィルトシャー⁷の聖職者団の中に、司教エルフスタンとともにある無学の男がいた。この男は、ミサに出席する他の人たちがするように、この水曜日の灰のところへ行こうとしなかった。仲間の者たちは、この男にミサ司祭のもとへ行き、自分たちが既に受けた秘蹟を受けるように懇願した。彼は「嫌だ」と言った。仲間がさらに強く望むと、彼は「そんな気はない」と言い、反抗的な言葉で「してはいけないこの時期に妻と肌を合わせてやろう」と言い放った。皆は彼をそのままにした。さてこの異教徒がこの週に馬で遣いに出かける用事ができた。すると犬が猛然と男を襲った。彼は身を守ったが自分の槍の柄が目の前に向かい立つと、馬はこの男を乗せたまま疾走したので槍が体を貫き、彼は倒れ死んでしまった。男は埋葬されると、七日以内に大地の多くの重荷がその上にかぶさった。というのも彼は少しずつの灰をずっと断り続けてきたからである。この同じ週に、ある愚か者がこの司教の聖職団のところへやって来た。彼も四旬節の大齋を何ら気にも留めず、司教がミサをたてている間に台所へ行き物を食べ始めた。彼は一口目で卒倒し後ろに倒れると、血を吐いた。しかし、それにもかかわらずようやくのこと命は取り留めた。

今日、神を通し幾多の奇跡をなす聖なるエゼルウオールド司教は、しばしば私たちに同じような話をこのように語った。エルフヘアハ司教⁸のもとにある男がおり、この者は好きなきはいつでも大齋にあっても酒を飲んでいて。ある日、この男はエルフヘアハ司教に自分の杯を祝福してくれるように頼んだが、司教は断じて受け入れなかった。愚か者は祝福を受けないままその場を立ち去って行った。たまたま人々が外で雄牛に犬をけしかけていた。すると雄牛はこの男に向かって突進し角で突いたので男は命を落としてしまった。時を得ない飲酒のために報いを受けたのである。

聖なる大齋のときや定まった断食の然るべき日に、時を得ず飲食する者皆に、この地で肉体は健康であろうともその魂は大きな償いを受けるであろうということ、よくよく知っておかせよう。私たちは絶えず永遠の生命を強く求めなくてはならない。というのは、その生命の中にこそ良い日々が存在するからである。たとえどんなにたくさん日々があったとしても、終わらない日はないからである。この地上の生活で良い日々を持ちたいと誰が望んだとしても、たとえその者が富める者であっても、この世においてはそのような日々を見出すことはできないのである。そのために、病となったり、不安だらけとなったり、あるいは友が自分のもとを離れて行ったり、財産が手元から消えて行くはめになったりする。またはある他の災いがこの世の生を送る者に降りかかり、さらに死を永遠に恐れることになる。永遠の生命においては、これら災いなるものは一切存在せず、悲しみや苦しみやあらゆる苦痛の種などない恵み多い一日が神ご自身とあり、すべての聖人の間に見られる終わりのない無常の喜びがともにある。もしどこかに喜びと栄光があるとすれば、ありとあらゆるものをお造りになられた方が住んでおられる所に、言葉に表せない栄光があると誰でも心から知ることだろう。神ご自身は主を敬う人皆にこうお約束になってお

られる。終わりなく、永遠に、主ご自身と同じ栄光のうちに住むことになるであろうと。さあ、よく心得ておくがよい。神は決して欺かない。そして心に留めておくがよい。主を欺いてはならない。もし主に偽りごとを言ったとしても、主を欺くことなどできはしない。自らをひどく欺くだけである。

永久に何ら骨折り仕事をせず——お金で済ませるものとして——世のために生きることができのなら、あらゆることが思うままに自分に起こり、絶えず諸悪を気かけずに済むのなら、幾多の財宝を、数え切れない金銀を分け与えてもいいという裕福な者たちがこの世には数多くいる。今私が述べたこれらの満足を得られたとしても、それが永遠の喜びと同じだと言うわけにはいかないであろう。この国を自由に行き来する人と比較された、牢獄に座している人の場合と同じである。富める者はこの世では、私たちの何人よりもあの悲しみから開放された終わりのない至福を享受することはできない。それでは何故その者が、あるいは私たち自身が、この世の不幸な生の中では好ましい功德と施しの行いでもって永遠の喜びを獲得することができないのであろうか。これについて、さらに例え話をしてみよう。ある盗賊を人が死に追いやろうとしたら、あなたは次のことをどう思うだろう。たとえ盗賊の男が金持ちとはいえ、人々が盗賊に許しを与え、そのため男は命拾いをしたなら、その全ての財産を与えないことがあるだろうか。しかしながら、そのとき人々が彼を解き放ったとしても、彼は永遠に生き永らえることはできないであろう。そう、数年間の猶予しか得られないのである。私たちが話すあの永遠の生命を手に入れることは、自らを氣遣う者にとっては今や深く熟考すべき事柄となる。さて、「どうすればこの永遠の命を獲得することができるだろうか」とあなたは思い悩み口にする事だろう。そこで私はあなたに言おう。あなた自身を神に委ねなさい。神が慈しまれるものを愛し、神が避けられるものから身を遠ざけるようにしなさい。神は不実を嫌い、誠実を愛す。嘘をついたり欺いたりしてはならない。誠実で正直でありなさい。何故なら、如何なる主人も不実な者を雇うことは好ましくないだろうし、神もまた信義を欠く者には考慮などしないからである。神の掟を今ここで全てあなた方に説いたとしても、それはとても退屈なものとなるだろう。そこで、これだけは実行しなさい。皆その生命を無益に費やすのではなく、賢い師から神の掟を学び、その学んだことをできる限り守るようにしなさい。もし神の御意志に反し実際に罪を犯したとしたら、心からそれを改めるようにしよう。そうすればその人は神の人になり、その償いの見返りとして、主は私たちが先に話したあの永遠の命をお与えになるだろう。

さて、どの人も聖三位一体の名において洗礼を授けられる。そして再び洗礼を施されることは許されない。それは聖三位一体への祈願が蔑ろにされないためである。まことの痛悔と悔悛⁹は悪を抑え、私たちが洗礼後に犯してしまった罪を再びこの身から洗い流してくれるのである。慈しみ深い神は罪を犯した者に関して、二つのとてもためになるお言葉を話されている。それは、「デクリナー アー マロー エト ファク ボヌム」¹⁰、すなわち「悪を避け、善を成せ」というお言葉である。絶えずわきまえて善を行わないのなら、例え悪から離れたとしてもそれで十

分とは言えない。悪を避けて悔悛し、施しの行為を成し、聖なる祈りと信仰と、神への希望と、神と人のまことの愛こそが私たちの罪を癒し取り除いてくれるのだ。もし心をこめてこれらの薬を用いるのならばのことである。神はこのように言うておられる。人が罪を負ったまま死を迎えることは望まず、それより罪から離れて生きる方を望んでおられると。

また全能の神はこうも言うておられる。邪な者と罪深い者が犯した罪の全てを悔い改め、私の言い付けを守り、有徳を成すならば、生きるであろうし、邪悪な死を迎えることもないであろう。私はその者が犯した如何なる罪も心に留め置くことはないであろう。もし悪行から身を引き、心の奥底から罪を悔い改め、師の教えに従い悔悛するのなら、拭い去れないほど重い罪などないのである。自分の罪を嘆き悲しみ、善行によりそれらの償いをする人は、二度と邪な行為を繰り返さぬように念を入れて注意しなければならない。悔悛の後、罪深い行いを新にしてしまった者は、神の怒りに触れる。そして嘔吐しそしてその吐いた物をまた口にする犬のようになる。¹¹罪を悔い改めるのにぐずぐずしてはいけぬ。というのは、主は悔い改める皆の人に罪の許しをお約束になられたからである。しかし主は、翌日まで遅らす者は誰にも確かな生命をお約束にはならない。師に自分の罪を明らかにすることを恥じてはならない。何故ならば、この世でまことの悔悛により告解を行おうとしない者は、全能の神の御前で、主の天使の一群がいる所で、全人類の目の前で、あらゆる悪魔の面前で恥を受けることになるからだ。私たちが呼び集められることになる、あの最後の審判の際においてである。そこで私たちの行為のことごとくがその一群の皆にさらけ出され、恥のために自分の罪を誰にも告白できない者は、天の住人と地の住人と地獄の住人の面前で恥辱を受け、その恥は未来永劫続く。もし神の人に¹²罪を告白し最後の審判の日までに悔悛しないのなら、神から罪の許しを授かることがないのは明白である。

人は自分自身に関し成さなかったことを言うことはできないし、また言うこともしない。偽りごとを口にするより命を捨てた方がいいとした、信仰深いある女について読んだ本の中にあるように。聖なる師ヒエロニムス¹³は、この女についてある所でこのように書き記している。ある男が、妻が汚らわしいことに姦淫を犯したと訴え出た。そこで、この罪のない女と前述の若者が二人して裁判官の所へ連れて来られた。姦淫を罰する際に常とされたように、姦淫を犯した二人は鞭打たれ、ひどく責め苛まれた。事の真相はどうか言わせるように、人々は鉄のかぎ爪で二人を引っ搔いた。若者は即座に死を受けて自分への拷問を終わらせたいと思った。そして自分ら二人を不当に訴えた。すると心堅固なこの女はおぞましい拷問の最中にこう語った。「おお、神秘なこと全てを知り尽くされておられる主キリストよ、人の魂と心の探求者である主よ、私が命を捨てることを拒まないであろうと知っておられる神よ、私は自分において事実と反することを話したりはいたしません。自分自身を裏切っても、主であるあなたに逆らって罪を犯したりはしたくないからです」そして彼女はこの若者に向かって言った。「ああ、人々のうちで最も忌まわしい方よ、何故あなたは無実の私たちをこのように偽って訴えようとするのですか。それでも、私は無実のまま強く死を選びます。そして潔白を身に從えて行きます。というのは殺害されても永

遠の命の中に入る者は死ぬことがないからです」そこで裁判官はこの女の志操堅固なところに驚いた。このような過酷な拷問を受けても若者が臆病からすぐに口に出したことを認めなかったからだ。が、裁判官は二人に死の宣告を下した。すると死刑執行人は即座に自らを偽ったこの若者に手をかけると、一撃のもと若者は首をはねられ横たわった。執行人は次に決心が固い女の方へ向き彼女の命を奪おうと思った。彼女は一撃に身を委ねると、執行人は満身の力で一振り打ち下ろした。ところが、すさまじく打ち据えたものの剣は皮膚に切り傷を与えたのみであった。死刑執行人は面目を逸し、再び強く打ち付けたものの、剣はびくともせず首に触れもしなかった。金貨が、両手を激しく振っている間に突然体から落ちた。女は彼に言った。「長年そのために働いてきた金貨があなたから失われないように、男よ、それを拾いなさい」と。彼女の命を奪おうとしている男の金貨に気がつく程、この女は残忍な執行人のもとにいても平然としていた。死刑執行人はそれでもなお彼女に剣を打ち下ろしたが、聖三位一体がその剣を跳ね返し、女の首を傷つけることはできなかった。そこで彼は剣で彼女の体を貫き通そうと思ったが、切っ先が柄の所まで折れ上がり彼女の体に触れることもままならなかった。彼女は人目を忍んで姦淫をするような人ではなかったからである。驚いてそこに立ちすくんでいた多くの者は、口々にもうこれ以上彼女を苛むのは止めろと執行人に言い、武器もろとも彼を追い払ってしまった。

神はこの毅然とした女を通して、主の奇跡を顕そうとしたのだ。その後、新しい剣と新しい死刑執行人を見つけることが皆の間で取り決められた。そうして彼女は命を奪われることになったが、首は打ち落とされなかった。しかしながら息絶えると、すぐさま埋葬された。ところが神はその晩に、彼女を死からいとも容易く復活させた。彼女は、以後この世で長らく、その潔白を奇跡で証明した全能な神を称えながら健康に暮らした。彼女は偽りを口にしなかったし自分自身に死を宣告しなかった。そのわけは、嘘をつく口はその人の魂を滅ぼすからである。

今あなたたちは、自分の罪を隠してはならないし、この女性の行為と同じく自分たちが成した以上のことを言ってもならないことが解ったであろう。何故なら、偽善は何であれ神に疎まれるものだからである。若者は自らを欺いたゆえに、即座に命を奪われた。これは、「私がサウル王を殺した」と言って、欺いてダビデ王におもねようとした男に、ダビデ王が死刑を命じた話¹⁴と同様である。ダビデ王は男が死んだときにこう叫んだ。「今おまえはサウル王を殺したと言ったな。おまえの血がその身の上に、そして頭の上に注がれるがよい¹⁵」と。罪を告白し償いをする者は、以前自分を苦しめてきた全ての者に許しを与えなければならない。主の祈り（パテルノステル）に述べられているように¹⁶、またキリストが福音書の中でこう言っているようにである。主は言った、「もしあなた方に害を成してきた人を心の奥底から許そうとしないのなら、天の主はあなたがたの罪をお許しにはならないであろう」¹⁷キリスト教徒は皆、主の祈りと信経（クレド）¹⁸を知っておかなければならない。主の祈りでお祈りをし、信経でその信仰を堅くするのである。師は平信徒に、主の祈りと信経の意味を教えなければならない。信徒が神に何をお祈りし、どのように神を信仰したらよいかを知るためである。私たちは善行をさらに積み重ね、できる間は毎日

永遠の富を蓄え増やさなければならぬ。何故なら、死後では何ら善行を積むことはできないからであり、この世で得た徳の報酬を死後に受けるからである。人は自分が多くの善行を成してきたと思いついても、またそう心に思い描いてもいけない。そしてそのようなことを多く成す必要もない。そのわけは、あたかも自分がもう十分に善人であるかのように錯覚し、善行を以後行う必要がないと思ってしまうなら、以前に成した些細な事柄を見失ってしまうことになるからである。私たち以前にあって、この世が始まった時から多くの聖人たちは、私たち後世の者が匹敵できない程、あるいは聖人たちが存命中に成した事柄を逃げられない程すばらしい徳を身に付けておられた。それゆえ、私たちは特に謙遜の心を持たなくてはならない。改めて次のことを黙想するのが私たちの務めであろう。全能なキリストが私たちのために自らを過酷な死に委ねられ、私たちの罪を取り払ってくださったとき、主が謙虚な心をどのようにお示しになられたか、また、人の謙虚さは全能の神の謙虚な心に対してどのように捉えられるであろうかと。

さて、ずっとこのような話をしてきた理由は、今日よりも水曜日にここに来る人は少なくなるであろうと思ったからである。今週か、少なくとも第二週目に告解がなされることが好ましい。永久の内に生きそして統治する主、永遠の神に、絶え間ない栄光がありますように。アーメン。

注 解

- * 本文の見出しは、IN CAPUT IEIUNII（大齋の初日に）となっている。
1. 「灰の水曜日」（現代英語では Ash Wednesday）とは四旬節（Lent）の初日の別名で、本文見出しの CAPUT IEIUNII（大齋の初日）のことである。「灰の水曜日」という名称は、「その日に祝別された灰（blessed ashes）で信徒の額にしるしをする習慣から生まれた」（Hardon, 「灰の水曜日」 p.537）ことに由来する。教会はこの日に「信徒に死について考えさせ、悔悛と痛悔がとくに四旬節中に必要なことを思い出させる」ことを目的とし、この灰を「謙虚さと悲しみの表現」としてみなし、「灰の水曜日」に悔い改めた者に灰がふりかけられた。現在は司祭とともに信徒は頭の上に灰を受ける。灰はシュロから作られることになっている。（cf. Hardon, 「灰」p.536）
 2. 「私たちの言葉で四旬節の大齋の初日」——原文は *þæt is on englisc. heafod lenctenes fæstenes* (that is in English, Head of the Lenten Fast).
 3. 「第三時」——原文は、*on undern* (at the third hour). 午前9時にあたる。
 4. 「跪く」——原文は、*cneowan* (kneel). C. Hall の *A Concise Anglo-Saxon Dictionary* (4th ed.) (Cambridge, 1962) には、“to know carnally” とある。
 5. 「この大地で、あなたは苦しんで日々を送り、汗を流してパンを食べる。そして生まれてきたその大地に再び戻る。というのは、あなたは塵であり塵に帰るからである」——原文は、*On geswincum þu leofast and on swate þu etst / þinne hláf on eorðan. oðþæt þu eft gewende / to þære ylcan eorðan þe þu of come / forðan þe þu eart dust . and to duste gewendst .* (In toil thou shalt live, and in sweat thou shalt eat / thy loaf on earth, until thou return again / to the same earth from which thou camest, / because thou art dust, and shalt to dust return.) この箇所は *Genesis* [創世記] (Cap.III. 17-19) にある。17 *Quia audisti vocem uxoris tuæ, et comedisti de lingo, ex quo, præceperam tibi, ne comederes, maledicta terra in opere tuo: in laboribus comedes ex ea cunctis diebus vitæ tuæ.* 18 *Spinæ et tribulos germinabit tibi, et comedes herbam terræ.* 19 *In sudore vultus tui vesceris pane, donec revertaris in terram de qua sumptus es: quia pulvis es, et in pulverem reverteris.* (17 Because thou hast hearkened to the voice of thy wife, and hast eaten of the tree, whereof I commanded thee that thou shouldst not eat, cursed is the earth in thy work; with labour and toil shalt thou eat thereof all the days of thy life. 18 Thorns and thistles shall it bring forth to

thee; and thou shalt eat the herbs of the earth. 19 In the sweat of thy face shalt thou eat bread till thou return to the earth, out of which thou wast taken: for dust thou art, and into dust thou shalt return.)

6. 「私たちは、古い立法の書の中でも新しい立法の書の中でも、自らの罪を悔いる者は灰で身を一面覆い袋地の粗服を身に纏ったことを読む。」——原文は、We rædað on bocum æðer ge on ðære ealdan é . ge on þære níwan . / þæt þa menn þe heora synna be-hreowsodon . / þæt hí mid axum hi sylfe bestreowodon . / and mid hæran hi gescryddon to lice . (We read in the books, both in the old Law and in the new, / that the men who repented of their sins / bestrewed themselves with ashes, / and clothed their bodies with sackcloth.) 「古い立法の書」, 「新しい立法の書」とはそれぞれ旧約聖書と新約聖書の中の書を指す。例えばこれらの書中に次のような記述がある。 *Daniel* [ダニエル書] (Cap. IX 3) Et posui faciem meam ad Dominum Deum meum rogare et deprecari in jejuniis, sacco, et cinere. (And I set my face to the Lord my God, to pray and make supplication with fasting, and sackcloth, and ashes.) *Prophetia Jonæ* [ヨナ書] (Cap. III 6) Et pervenit verbum ad regem Nineve: et surrexit de solio suo, et abiecit vestimentum suum a se, et indutus est sacco, et sedit in cinere. (And the word came to the king of Ninive; and he rose up out of his throne, and cast away his robe from him, and was clothed with sackcloth, and sat in ashes.) *Evangelium Secundum Mattheum* (Cap. XI 21) Væ tibi Corozain, væ tibi Bethsaida: quia, si in Tyro et Sidone factæ sunt in vobis, olim in cilicio et cinere poenitentiam egissent. (Woe to thee, Corozain, woe to thee, Bethsaida: for if in Tyre and Sidon had been wrought the miracles that have been wrought in you, they had long ago done penance in sackcloth and ashes.)
7. 「ウィルトシャー」——原文は、wiltun-scir (Wiltshire). イングランド南部の州。
8. 「エルフヘアハ司教」——原文は、ælfge bisceop (bishop Ælfgeah). St. Alphege (954-1012) のこと。初めはグロスターシャー (Gloucestershire) のディアハースト (Deerhurst) の修道士であった。エゼルウオルドの後を継いで、984年10月にウィンチェスターの司教に任命され、1006年まで勤めた。その後、没するまでカンタベリーの大司教の任を果たした。
9. 「痛悔と悔悛」——原文は、behreowsung and dædbot (contrition and penance). 痛悔も悔悛も「自分の犯した罪を悲しみ、悔やみ、神に心を向ける徳または心構え」(cf. Hardon, 「痛悔」・「悔悛」) のこと。悔悛は特にその「秘跡」をも指し、「洗礼後に犯した罪を告白し、神の名によって司祭から罪の許しを受ける」(cf. Hardon, 「悔悛」) ことも表す。
10. 「デクリナー アー マロー エト ファク ボナム」——原文は、Declina a malo et fac bonum. 古英語訳は、buh fram yfele . and dó gód (Turn from evil, and do good.) これと同様な文言が、*Liber Psalmorum* [詩篇] (Cap. XXXIV. 14) Diverte a malo, et fac bonum: (Turn away from evil and do good.) に見られる。
11. 「嘔吐しそしてその吐いた物をまた口にする犬のようになる」——原文は、he bið þam hunde gelic spywð and eft ytt þæt þæt he ær aspaw . (he is like the dog who spueth, and again eateth that which he before spued up.) 聖書の次の箇所を参照。 *Proverbia Salomonis* [箴言] (Cap. XXVI. 11) Sicut canis, qui revertitur ad vomitum suum, sic imprudens, qui iterat stultitiam suam. (As a dog that returneth to his vomit, so is the fool that repeateth his folly.)
12. 「神の人」——原文は、godes menn (man of God). 司祭のこと。
13. Eusebius Hieronymus (347?-420?). 聖書学者でウルガタ版ラテン語聖書の翻訳者。シリアの砂漠で隠修士として4, 5年間修業し、その後ベツレヘムの修道院で聖書の研究と翻訳に従事した。
14. この話の言及は、*II Liber Samuhelis* [サムエル記下] (Cap. I. 1-15) を参照。また (Cap. IV. 10) にもその話が再び触れられている。Quoniam eum, qui annunciaverat mihi, et dixerat: Mortuus est Saul: qui putabat se prospera nunciare, tenui et occidi eum in Siceleg, cui oportebat mercedem dare pro nuncio. (The man that told me, and said: Saul is dead, who thought he brought good tidings, I apprehended, and slew him in Siceleg, who should have been rewarded for his news.)
15. 「おまえの血がその身の上に、そして頭の上に注がれるがよい」——原文は、beo þin blod ofer þe and bufan þinum heafde . (be thy blood upon thee and upon thine head.) *Liber Samuhelis* (Cap. I. 16) に、Sanguis tuus super caput tuum: (Thy blood be upon thy own head.)

16. 「主の祈りに述べられているように」とは, *Evangelium Secundum Mattheum* [マタイによる福音] (Cap.VI. 12) のことを指す。Et dimitte nobis debita nostra, sicut et nos dimittimus debitoribus nostris. (And forgive us our debts, as we also forgive our debtors.)「主の祈り」はラテン語で, Pater-Noster.
17. 「もしあなた方に害を成してきた人を心の奥底から許そうとしないのなら, 天の主はあなたがたの罪をお許しにはならないであろう」——原文は, Buton ge forgifan þam mannum þe wið eow agyltað / mid inwerdre heortan . nele se heofonlica fæder / eow forgifan eowre gyltas . (Except ye forgive those men who sin against you / with your inmost heart, your Heavenly Father will not / forgive you your trespasses.) これは *Evangelium Secundum Mattheum* (Cap. VI. 15) にある。Si autem non dimiseritis hominibus: nec pater vester dimittet vobis peccata vestra. (But if you will not forgive men, neither will your Father forgive you your offences.)
18. 「信経 (クレド)」——古英語では, creda (creed, confession of faith). ラテン語では, Credo で “I believe.” の意味。